

TBT10月「五大都市選挙情勢分析」

李明峻

台湾では、11月27日の五大都市選挙を控え、目下、選挙情勢が最も耳目と衆知を集める政治テーマとなっている。そもそも、五大都市選挙とは「台北市、台北県が昇格する新北市、台中市と台中県が合併する大台中市、台南市と台南県が合併する大台南市、高雄市と高雄県が合併する大高雄市」という5つの行政院直轄市の首長選挙であり、これらの都市の人口は実に台湾総人口の60%以上を占める。このため、五大都市選挙の結果は、台湾の政治基盤の変化に直結するものであると同時に、一般的には2012年に行われる総統選挙の前哨戦とも目されている。現在の政権与党である国民党(ブルー陣営)も、野党第一党である民進党(グリーン陣営)も、五大都市のうち三都市で勝利しなければ、2012年の総統選挙での勝利は覚束ないだろう。

元々、国民党は台北市と台中市では優勢を保っていたし、一方の民進党は台南市および高雄市で安泰しており、お互いの勝負の分かれ目は台北県(今般の選挙では新北市に昇格)がカギとなっていた。ただ、民進党は台北市、台中市および新北市での候補者選びで民心の獲得に成功した。さらに、台中市では銃撃事件の発生によって治安問題に疑問符が付き、台北市でも新生高架橋や花博に絡む汚職事件が明るみに出たことで、国民党が優勢を保っていた台北市と台中市に突然黄

色信号が灯ることとなった。国民党の台北市長候補である郝龍斌(現台北市長)の支持率が、民進党側の蘇貞昌候補に前例のないほど大きく水をあけられているだけでなく、大台中市の蘇嘉全候補(民進党)も国民党の胡志強候補を大きくリードしている。さらに、南部の2都市では、民進党の支持率が国民党を2倍以上と大きく引き離しており、新北市においても、双方の差は3%という誤差の範囲内を行ったり来たりしている。9月19日の大型台風上陸で高雄は浸水被害を被ったため、民進党籍である陳菊・高雄市長の支持率は下降したものの、なお他の2人の候補者を大きく引き離している。このため、選挙情勢は国民党にとって明らかに極端に不利といえるであろう。

馬英九総統は就任後2年の間、経済の立て直しに全力を注ぎ、ECFA締結を推し進めていった。しかしながら、一般の国民は経済が好転している実感はなく、失業率も未だ5%以上、さらには物価や家賃の上昇と相まって、馬英九が期待したECFAという政治的功績は、五大都市選挙では「加点」されることは無くとも、「減点」される可能性は大いにある。また、馬英九自身のリーダーシップと政権の実行力にも疑問符が付いている。そのため、民衆の反応は馬政府の執政能力に対し、当初の期待から懐疑へ、そして現在の失望へと変化してきた。8月中旬、馬英九はECFA締結と国会で

の承認によって利を得たかのように見えたが、執政満足度は大幅に下がり、呉内閣の満足度も30%以下に落ち込んだ。民衆は馬政権の執政能力に強い不満を抱いていることが分かるだろう。これに対し、民進党の県知事および市長の政治功績に対する支持率は軒並み及第点である。また、先日の世論調査で発表された地方自治体の首長満足度調査では、国民党首長が下位を独占する結果も出ている。選挙に強いといわれてきたブルー陣営だが、明らかに綻びが出始めているのだ。

国民党が不利な状況に陥ったのは、執政能力の点で有権者を満足させられなかったことや、県知事・市長の政治功績に対する支持率が民進党の首長に遠く及ばなかったこと以外に、国民党の「生態」の変化も原因の一つに挙げられるだろう。

まず、国民党を支える核となる党員は、「深藍」と呼ばれる原理主義的な国民党員であり、そのため、少数の特定の人々によって権力が寡占される構造になっている。過去においては、こうした寡占集団は一般の選挙民と交わることはなかったものの、その他の権力を共有し、各地方自治体と広く結びつき、その地方組織を使って選挙の勝利を得てきたのである。しかし、現在ではこうした組織による勝ちパターンは馬英九主席によってほぼ排除されてしまったに等しい。馬英九とそれに連なるグループは、地方勢力を黒金(ブラックマネー)に繋がるものと見ていたことから、地方組織に対して冷淡かつ敵視さえしているのだ。馬グループは、政党運営の主眼は広報であり、広報によって政治も選挙も

処理できると考えている。そのため、大量のメディア取材を受け入れてより一層の地方勢力排除を行ったため、国民党の地方における実力はみるみるうちに衰退し、その結果として過去数度の補選や「三合一(地方自治体首長、地方議員の合同選挙)」で国民党が全敗する原因ともなった。

次に、国民党は馬グループの指導スタイルと人材配置哲学によって、党の内部構造に三大矛盾が形成されつつある。一つは省籍矛盾である。馬英九は少数の人間で権力を寡占しており、政策決定するエリアが非常に狭くなっている。そのために、国民党内の「本土派」は日に日に隅へ追いやられている状況だ。二つ目は中央と地方の矛盾である。馬グループが地方組織に冷淡なことで、選挙の候補者選びの際に地方との実力不一致を来しているのだ。その結果、党内での反感を抱くこととなっている。三つ目はブルー陣営とオレンジ陣営(親民党)との矛盾である。国民党が政権を奪回出来たのは、親民党との合併の結果であった。しかし、権力の分配に際しては、なおもブルーとオレンジのえり好みが行き横し、双方の団結に影響を及ぼしている。これら三大矛盾が国民党の求心力の衰退を産み出しており、選挙情勢にとって不利になることは自明の理であろう。

そのほか、陳水扁・前総統の汚職事件を国民党が執拗に追求し続けたため、民進党側も膿を出さざるを得なくなったのは怪我の功名であった。さらに、陳水扁時代に党の屋台骨を支えていた人物が次々と離党したため、民進党にとって再建の

チャンスともなったのである。

ポスト陳水扁時代の民進党は、人材に限らず経営モデルの面でも、以前とは大きく異なっている。高学歴かつ政治面でも優秀な成績を収めた人材を擁しているうえ、地方組織の運営もかなり成功しているといえる。今般の農田水利会の選挙を見れば分かる通り、こうした状況は民進党にとって大きな追い風となっている。このため、過去と同じ視線で11月の五大都市選挙を観察するべきではない。新しい民進党と新しい国民党が初めて戦う重要な一戦として観察して欲しい。

五大都市選挙は、馬英九にとって2012年に再選し政権を維持出来るか否かの試金石と見られており、国民党自身も同じ考えのはずだ。五大都市選挙の結果に言及するのは時期尚早かもしれないが、ここ2年間の台湾の民意の変化は誰の目にも明らかであり、両党の実力の変化も論を待たないところであろう。統一派メディアでさえ五大都市選挙における国民党の選挙結果を芳しくないものとしており、国民党が3つの都市で勝利することもかなり難しく、民進党は4勝もしくは全勝のチャンスさえあるとしている。B